

心の中に聞なんてないんだよ。自分は自分でしかありえない。それを理解できない他人が、理解できないものに、便利な名前をつけただけのことなんだ。

大型リカーショップの裏口で、河瀬史は額に汗をかきながら、真夏の太陽が西に沈むのをじっと見ていた。仕入れの担当者是一通りの業務を終えないと話を聞いてくれない。待つことも仕事のうちだとわかっている。地味に苦痛だった。

前の歩道を、男子高校生らしき四、五人の集団が通り過ぎていく。着崩した制服と、鬱陶しいほど長い前髪。ギャハハと騒々しい笑い声がやたらと癩に障る。どうせお前も、あと五、六年もすればスーツを着て、ヘコヘコ頭を下げて回る羽目になるんだ。後ろ姿に無言で毒づいている自

分が虚しくなり、大きなため息をついた。

カップラーメンが有名な大手食品会社「L E M I O」に入社して一年四ヶ月。営業部に配属された河瀬は、日々小売店を回り、自社製品を売り歩く毎日だった。

希望していたのは商品企画部だったのに、実際に配属されたのは営業。かなり落ち込んだ。けれど同じ営業の先輩である布宮が四年も異動願を出し続けていると聞いて、「L E M I O」の中でも商品企画部は花形部署、狭き門なんだと知った。それでも異動したいという思いは日に日に強くなっていく。

足が棒になるまで歩き回って、あんたんちのヒット商品はカップ麺だけだねと嫌味を言われ、頭を下げ続ける毎日。営業も必要な仕事だとわかっている。こんなことばかりしていたら自分は成長できないような気がする。そう、売る側ではなく作る側に回りたい。自分だったら……何となくだけど、いい新製品が作れるような気がするのだ。

辺りがすっかり暗くなった頃、ようやく仕入れ担当者に呼ばれた。散々待たされたし、横柄なタイプだったら最悪

だなと思っていたら、いかつい容姿に似合わず物腰が柔らかく、契約もバツチリ取ることができた。

何度も頭を下げながら店を後にし、会社へ戻ったのは午後九時。直帰の連絡もしていなかったし、少しだけやり残した仕事もある。流石に誰も残っていないだろうと思っていたのに、営業のある三階には明かりがついていた。自分が最後じゃないと思うと、何だかホッとすする。

残っていたのは柴岡部長で、缶コーヒを片手にパソコン画面と向かい合っていた。

「お疲れ様です」

閑散とした営業部に、自分の声が響く。部長はゆっくりと顔を上げ、こちらを見た。チラリと腕時計に視線を落とす。

「随分と遅かったね」

「先方が忙しくて、なかなか話を聞いてもらえなかったんです。けど契約は取れました」

部長の目が笑顔の形に細められた。

「頑張ったね、ご苦労様」

労りの言葉に肩がフツと軽くなる。欲しい時に欲しい言

葉をくれる優しい上司が、河瀬はけっこう気に入っていた。

背が高く痩せているので神経質に思われがちだが、柴岡部長は営業部の誰よりも大らかだ。声を荒らげている姿を見たことがない。怒られることもあるけど、決して理不筋なことは言わない。

采配も上手い。営業はコミュニケーションスキルが必要で、どうしても向き不向きがある。努力だけではどうにもならないことも多い。部長はその辺の資質をいち早く見抜いて、この社員は営業で実力を発揮できないと判断すると、本人の資質に合っている部署へと異動させる。

だから営業ではいわゆる「できない奴」がいない。誰もがそこそこ売り上げて、いつも成績が目標準平均を上回っている。ノルマ、ノルマと殺伐となりがちな部署にいて、みんな驚くほど仲がいい。

たまに大学の友人と会って、嫌な上司の愚痴を聞かされるたびに「仕事できて、優しくて、信頼できる上司」を持つ自分をつくづく恵まれてるなど思う。

「まだ帰らないんですか？」

そうだねえ、と吹きながら部長はずり下がった眼鏡を右手でクツと押し上げた。

「早く帰っても、することがなくてね」

部長は四十二歳で独身だ。若い頃、結婚を考えた恋人と死に別れ、その人が忘れられないから誰とも深い関係になる気はないらしい。先輩に話を聞いた時、この部長ならそれもアリだなど妙に納得した。

そういえば就職した年、部長のお母さんが亡くなったので葬式に行った。霊前の写真は、母親とは思えないほど若く、美しかった。帰り際、知り合いらしき喪服の中年女性が「……鬱が酷くて自殺したみたいよ」と小声で話していたのを耳にして、人の家の秘密を盗み聞きした決まり悪さに居たたまれなかった記憶がある。……部長は「病気で」としか言っていなかった。そういうことも関係して心労があつたのか、親御さんの葬式のあと、部長は体調を崩して三週間ほど会社を休んでいた。

「君は夕食を済ませたのかい？」

部長に声をかけられて、河瀬は「まだです」と首を横に

二席だけ。店の中は小綺麗で、焼酎の種類が多かつた。

部長は小食で、酒もちびちびと嗜む程度。それなのに沢山料理を注文してくれた。「君はまだ若いんだから、どんどん食べなさい」と言われ、気を使ってくれているんだろうなと思いつつ、遠慮せずに飲み食いした。

酔いが回つたのか気分がよくなつて、河瀬は高校の時に学校内で酒を飲んであやうく見つかりそうになつたことや、大学の時にバックパッカーをやつたことを一人でペラペラと喋つた。部長は面白そうに「それで」と相槌を打ちながら話を聞いてくれる。

途中でふと、自分ばかりが喋っていることに気がついた。部長の話も少しは聞いてあげた方がいいのかもしれない。上司が部下を食事に誘うのは、愚痴と相場は決まっている。

試みに黙つてみたら、テーブルの上はすぐさま沈黙した。部長はグラスの焼酎を一口飲むと、すっかり冷めた卵焼きをゆつくりと口許に運んだ。何か話題を振つた方がいいのかもしれないが、仕事の話はしたくない。けどどんな

振つた。

「私もそろそろ上がろうと思つていたんだが、よかつたら何か食べて帰らないか」

気さくな人なのでよく話をするけれど、上司は上司。プライベートで誘われたのは初めてだった。こんな下つ端の自分を誘うなんてどうしてだろうと思つたものの、美味しいものを奢つてもらえるかもしれないという現金さが顔を出し、「はい」と答えていた。

近くによく行く店があるというので、会社を出て少し歩いた。夜になつても外は蒸し暑く、吹く風は、どことなく生温かつた。

「何だか雨が降る前の風みたいだね」

大風に飛ばされる髪を右手で撫でつけながら、部長は呟く。並んで歩くと、身長が一八五センチある河瀬の視線よりも、部長は少し低い。

「ほんとですわ、ちょっと気味が悪いかも」

どうでもいい話をしながら十分ほど歩き、裏通りにある小さな居酒屋に入った。カウンターがメインでテーブルは

話だつたら乗つてくるんだろう。

「部長って、若いですよ」

それは部署でも定期的に話題になつていた。柴岡部長は見た目が三十五、六で、とても四十を過ぎているとは思えない。自分には部長と同じ歳の叔父がいるが、そつちは小太り、無精髭のハゲで、とても同年代の生き物とは思えなかつた。

「そうかな」

微笑んでるから、まんざらでもないんだろう。歳より若いと言われて、嫌な気持ちになる人間はいない。再び沈黙が訪れる。穏やかな瞳は、決まり悪さを覚えるほどじつと河瀬を見つめた。

「君はとても健康だね」

「俺、体力には自信ありますから」

ガツポーズをとつてみせると、部長は真顔で首を横に振つた。

「そうではなくて、君の心が健康だと言いたかつたんだ」
まるで叔父みたいなことを言う。神経科が専門の叔父

は「心の健康」が口癖だが、部長の口から聞くのはどこか違和感があった。ふと、部長のお母さんのことを思い出す。心が健康でない人が傍にいたから、そういう言い方をするんだらうか。

「君を見ていると、それだけで元気になれそうな気がするよ」

部長はグラスの底に残っていた焼酎を飲み干す。下っ端のくだらない昔話を聞いているだけでそこそこ満足はしているようだった。

終電の時間が近づいてきたので、店を出る。期待していた通り、飲み代は全て部長持ち。形ばかり「俺も払います」と言ってみると「僕から誘ったんだしね」と断られた。ここは甘えてもいいだろうと、河瀬は「ごちそうさまでした！」と店の前で派手に頭を下げた。

外はいちだんと風が強くなっていた。地下鉄の駅に近いので公園を横切っていると、隣からフツと人の気配が消えた。振り返ると、部長はジャングルジムの横で立ち止まっていた。

人もまばらな駅のホームで電車を待つ。歩いたことで、ふわふわした酔いも幾分醒めてきていた。

「暗闇が怖くないのかい？」

こちらへの問いかけとも独り言ともつかぬ呟きに、河瀬は振り向いた。

「暗闇を見ていると、いつかあの中に呑み込まれてしまいうような気がして怖くなる」

公園の、外灯が切れた狭間の暗闇だ。数歩歩けば抜ける。

「暗い場所が怖いなんて、子供じゃないんですから」

思わず漏れた本音。非難めいた言葉にひよつとして気を悪くさせたかと思つたが、部長は笑っていた。笑いながら手許の腕時計に視線をやると「電車、まだかな」と暗い線路の向こうを覗き込んでいた。

「どうしたんですか？」

「ああ、どうも足許が暗くてね……」

公園は二カ所ほど外灯が切れている。ジャングルジムの周囲は暗いが、手前の道はうっすら見えているから歩けないほどじゃない。そういえば叔父が「四十過ぎると観面、目にくるからさ」とぼやいていた。……老眼は、夜目も利かなくなるんだらうか。

「下には何もありませんから、まっすぐ歩いて大丈夫ですよ」

そう言つてやつても、動こうとしない。最終電車の時間が迫っていることが気になって、河瀬は足早に引き返した。部長の左手を握る。夏なのに氷のようにひやりとした指先だった。

「本当に大丈夫ですか」

手を引いてやると、ゆつくりと歩き出す。公園を出て周囲が明るくなると、どちらからともなく自然と指は離れた。地下鉄の駅へと続く階段も思ひのほか暗い。大丈夫かなと思つて振り返ると、手すりをつたいながらゆつくりと階段を下りてきた。